

保育の環境に関する一考察(Ⅱ)

---「家庭的な親しみとくつろぎの場」について---

土山 忠子 (大阪薫英女子短期大学)

1. 研究の目的

保育所は、子どもにとっては「昼間の家庭」としての役割を担っており、その中でも保育室は人間形成の基礎時期であり、感受性の強い乳幼児が長時間、生活する場であるから、その環境の良否は保育の質に関わる重要な要因であることを踏まえ、昨年の本大会においては、保育室の物的環境の実態を調査・考察して報告してきた。その結果を見ると大多数の保育室は、ベット、ロッカー、タンス、棚、玩具箱などの備品は壁面に一列に並べて配置し、保育室の中央を広く開けてオープンスペースを作り、そこにテーブルと椅子を置いたり、カーペットなどを敷いて遊び場になっているのが一般的であった。この保育室でのオープンスペースの設営は、子どもにとって果してくつろいで安定できる生活の場となっているのかどうか、また遊びを誘発する魅力的な空間としての役割を果しているのか、については今後の課題として残るところであった。

今回は、子どもにとって「家庭的な親しみとくつろぎの場」としての保育室の具体的な環境構成に視点を置いて、現場の保育者がこのことについてどのような具体案を持っているのか、また実習だけを経験してきた保育学生は、家庭的な保育室の構成をどのように捉えているのかについてアンケート調査を試みた。この調査を通して「家庭的な親しみとくつろぎの場」としての保育室の環境構成の具体化を図り、子どもの健全な心身の発達を助長することを目的としている。

2. 研究の方法

① 調査対象 <表1>

イ. 大阪府下6ヵ園の保育者92名と、宮崎県下42ヵ園の保育者42名、合計134名。

ロ. 本学幼児教育専攻2回生125名。

② 調査の時期

イ. 保育者の調査の時期

1993年1月から同年9月の間に実施した。

ロ. 保育学生の調査時期

1993年6月の保育所実習前にアンケート用紙を配布して実習終了直後に回収した。

<表1>
回答者の内訳

保育所数	保育者人数
大阪府	92名
S園	20名
M町4園	46名
K園	26名
宮崎県下42園	42名
合計	134名
保育学生	125名

③ 調査内容(質問紙による)

イ. 保育者用

- 子どもにとって保育室が「家庭的な親しみとくつろぎの場」となるためにどんな配慮が必要と思われますか、具体的な内容をお書き下さい。
- あなたの現在の保育室の環境はどう思われますか。(大変よい、まあまあ良い、改善したい、改善のしようがない)

ロ. 保育学生用……保育者用の質問内容を客観的な観察者の立場からの問いかけに変えた。

3. 結果・考察

① 保育者の経験年数<表2>

<表2> 保育者の保育経験年数

経験年数	1~5年	6~10年	11~15年	16~20年	21~31年	平均
S園	7名(35%)	4名(20%)	7名(35%)	1名(5%)	1名(5%)	8.7
M町4園	27名(58.6%)	4名(8.6%)	4名(8.6%)	10名(21.7%)	0	7.2
K園	8名(30.7%)	7名(26.9%)	1名(3.8%)	8名(30.7%)	1名(3.8%)	10.2
宮崎42園	16名(38%)	12名(28.5%)	6名(14.2%)	5名(11.9%)	2名(4.7%)	8.5
合計	58名(43.2%)	27名(20.1%)	18名(13.4%)	24名(17.9%)	4名(1.5%)	8.7

保育者の経験年数は、新任から20年以上のキャリアの保育者まで広がっており、各園によって差異があるが、平均経験年数は、M町の7.2年からK園の10.2年、全体の平均は8.7年である。

② 回答の内容について

「家庭的な親しみとくつろぎの場」についての質問は、複数回答で箇条書きに記述してもらった。保育者の回答内容を整理してみると、約20種類の項目があり、保育学生では約30項目で多岐に亘っている。これらの回答内容の主な共通項目を9項目に分類したのが<表3>から<表11>である。

イ. 「家庭的な雰囲気をつくる。居心地のよいスペースを作る……」<表3>

<表3> 「家庭的な雰囲気をつくる。居心地のよいスペースを作る……」

宮崎県	S園	M町4園	K園	計	保育学生
8名(19%)	6名(30%)	20名(43.4%)	10名(38.4%)	44名(32.8%)	0

この保育者の回答は具体的でなく抽象的概念で、環境構成についての基本的な考え方で、回答者の3分の1が書いている。保育学生は、保育者と立場が違い客観的に保育室を観察して書いているので、この表現の回答は皆無であった。

ロ. 人的環境「受け入れてくれる保育者の存在、家庭的であることがどういふことを理解した保母がいる。大好きな保母がいる……」<表4>

<表4> 人的環境「受け入れてくれる保育者の存在……」

宮崎県	S園	M町4園	K園	計	保育学生
8名(19%)	2名(10%)	16名(34.7%)	12名(46.1%)	38名(28.3%)	0

物的環境だけでなく保育者の保育観や人柄など人的環境の重要性を認識している。保育学生ではこの回答が見当たらないのは、やはり観察者の立場であるから物への関心度が高いといえる。

ハ. 「家庭で使用している家具類(コタツ、ソファ、ジュタン、タンス……)を入れる」<表5>

<表5> 「家具類(こたつ・たんす・絨毯……)の配置」

宮崎県	S園	M町4園	K園	計	保育学生
6名(14.2%)	2名(10%)	8名(17.4%)	14名(53.8%)	30名(22.3%)	6名(4.8%)

K園が他園に比して高率で、家具を入れることによって、教室的な保育室をリビング的な保育室へ変えていこうとする意識の現われといえる。保育所は固い規格品の机と椅子という固定概念の転換が必要である。

ニ. 「たたみを入れる」<表6>

<表6> 「たたみを入れる」

宮崎県	S園	M町4園	K園	計	保育学生
10名(23.8%)	2名(10%)	13名(28.2%)	1名(3.8%)	26名(19.4%)	53名(39.5%)

保育学生が「たたみ」が入れてあることで家庭的な配慮であるとして40%近い回答をしているのが目立っている。

ホ. 「植木鉢をおく。花を生ける……」<表7>

<表7> 「植木鉢(観葉植物など)をおく。花を生ける……」

宮崎県	S園	M町4園	K園	計	保育学生
7名(16.6%)	3名(15%)	5名(10.8%)	8名(30.7%)	23名(17.1%)	13名(10.4%)

花や植物を保育室に入れることへの関心は、K園が30%で他園は10%から15%前後である。

ヘ. 「手作り玩具や遊具を入れる」<表8>

<表8> 「手作り玩具・遊具を置く」

宮崎県	S園	M町4園	K園	計	保育学生
4名(9.5%)	1名(5%)	8名(17.4%)	2名(7.7%)	15名(11.2%)	6名(4.8%)

保育者の手作り玩具への関心が高いといわれるわりには、家庭的な雰囲気作りとの関連としての捉え方は、他の項目に比べて低率である。保育学生では5%弱で、実習園では手作り玩具があまり目に入らなかったのか、関心がなかったのか明らかではない。

ト. 「コーナーを設ける」<表9>

<表9> 「コーナーを設ける」

宮崎県	S園	M町4園	K園	計	保育学生
6名(14.3%)	6名(30%)	7名(15.2%)	12名(46.1%)	31名(23.1%)	1名(0.8%)

コーナーを設けることによって、子どもにとって広すぎない空間を構成して、くつろぎ落ち着ける場を作ることが出来ると理解している保育者は、それぞれの園のコーナーに対する考えや取り組み方で違いが出てくる。保育学生の観察では、125名中1名しかコーナーの存在を意識していない。これは実習園にコーナーが設けられていなかったのか、設けられていても家庭的な雰囲気作りに役立つしていると思わなかったのかは、明らかでない。コーナーさえ作れば家庭的であると断言できない。

チ. 「布や木などの材質のインテリアの使用」<表10>

<表10> 「布や木などの材質のインテリア」

宮崎県	S園	M町4園	K園	計	保育学生
0	2名(10%)	4名(8.7%)	3名(11.5%)	7名(5.2%)	2名(1.6%)

リ. 「壁面構成(画用紙で作った切り絵、季節感のある絵……)」<表11>

<表11> 「壁面構成(画用紙で作った切り絵・季節感のある絵……)」

宮崎県	S園	M町4園	K園	計	保育学生
10名(23.8%)	1名(5%)	2名(4.3%)	0	13名(9.7%)	19名(15.2%)

<表10>と<表11>の回答は裏表を為しており、<表10>が低率の園の保育者は<表11>の回答が高率を示しており、その逆の園もある。すなわち紙を使用した壁面構成を主とする園では、布や木の材質を使用したインテリアを保育室に取り入れていないということである。

ヌ. 「保育室に対する自己評価」<表12>

<表12> 保育室に対する自己評価

評価	大変よい	まあまあよい	改善したい	改善のしようがない	無答
宮崎県	5名(11.9%)	15名(35.7%)	18名(42.8%)	2名(4.7%)	2名(4.7%)
S園	0	9名(45%)	9名(45%)	0	2名(10%)
M町4園	0	18名(39.1%)	26名(56.5%)	1名(2%)	1名(2%)
K園	4名(15.3%)	9名(34.6%)	6名(23%)	1名(3.8%)	6名(23%)
計	9名(6.7%)	51名(38%)	59名(44%)	4名(2.9%)	10名(7.4%)
保育学生	22名(17.6%)	91名(72.8%)	10名(8%)	1名(0.8%)	1名(0.8%)

自己評価は、あくまでも保育者個人の主観によっているので、評価の観点や評定の基準のおき方によって違ってくる。「大変良い」と評価していても、客観的に見た場合には「もっと改善すべきである」という評価になるかもしれない。ただ全体的にみると「改善したい」と思っている保育者が44%で、保育室の環境構成に力を入れようとする姿勢が見られる。

以上の調査結果を通して「子どもにとって家庭的な親しみとくつろぎの場」となる保育室の環境構成の具体化は、保育者にとっての関心事であり、今後の保育内容の充実にかかわる研究課題であるといえよう。